様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究(A)（一般）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｈ００５４７

研究課題名（和文）19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯

研究課題名（英文）An Intersection of People and Books - A Look at military Knowledge in the 19th Century

研究代表者
谷口　眞子（TANIGUCHI, Shinko）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：７０５８１８３３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　25,400,000円

研究成果の概要（和文）：19世紀にはナショナリズムが高まり、常備軍を備えた国民国家が形成された。一方、軍事的世界においては、軍人が国境を越えて移動し、自身のネットワークを通じて軍事情報を共有していた。兵器や戦術・戦略に関する軍事関連書もヨーロッパ内外で出版・流通・翻訳・受容された。その移動は西洋からその他の諸地域へという一方向に限らず、グローバルに各方面にわたった。植民地における「文明化された軍人」の経験が、本国の軍事的実践に反映したこともある。軍事的学知は近代国家の軍事力向上に一定の役割を果たしつつ、政治的な国家間対立を越えて共有され、諸地域における軍事行動のダイナミックスに影響を与えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近代国民国家の人と支配領域を前提とした「戦争」「軍人」像はナショナリズムと深く結びついている。しかし、当該期の軍事的世界には、国境を越えた軍人や軍事関係者による人的ネットワークがあり、軍事関連書も国境を越えて流通・翻訳・受容されていた。このような人と書物のグローバルな交錯からは、西洋列強による一方的な帝国主義の強要という政治的理解に回収されない側面をうかがうことができる。内的深化＝ナショナリズムと外的拡大＝帝国主義の双方向の動きとその相互作用を、軍事的学知の生成・流通・受容から新たにとらえ直す可能性を開いたと言えよう。

研究成果の概要（英文）：In the 19th century, nationalism was enhanced, and nation-states were formed with standing armies. Meanwhile, in the military world, soldiers, officers or military personnel moved across their national borders and shared military information through their own networks. Books of military science on weapons, tactics, and strategy were also published, distributed, translated, and accepted inside and outside Europe. The movement was not limited to one direction, from the West to the rest of the world. In some cases, the military experiences of “civilized soldiers” in the colonies were reflected in military practice at home. Military knowledge and learning were shared over the political confrontation between or among nations and gave influence on the dynamics of military actions in various regions, playing a certain role in the improvement of the military capabilities of modern countries.

研究分野：日本近世史

キーワード：19世紀　軍人　書物　学知　移動　戦争　情報　外交

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究は、(1)軍人と軍事関連書の移動に着目し、(2)軍事的学知をその実践的文脈においてとらえる点で、次のような学術的背景によっている。

(1)軍人と軍事関連書（人とモノ）の移動への着目

ジョン・アーリは『グローバルな複雑性（叢書・ウニベルシタス）』・『モビリティーズ―移動の社会学』で新たな移動論パラダイムを提起し、ケネス・ポメランツ『大分岐―中国、ヨーロッパ、そして近代世界経済の形成』は、欧米から東アジアまでを射程に入れて近代世界経済の形成を論じた。歴史学ではグローバル・ヒストリー研究が提唱され、人やモノの動きから、地理的空間的共時性に着目する意義が示されている。しかし、これらは西洋中心史観から脱し切れているとは言えない。19 世紀は人とモノのグローバルな移動が盛んになった時期であり、アジアからヨーロッパまでを一つの空間としてとらえる必要がある。近代国民国家が戦争をともないながら形成されてきたことを考えると、特に軍人と軍事関連書が着目される。

(2)実践的文脈における軍事的学知への着目

軍人の広範な移動と同じく、軍事に関する知識や技術もグローバルに流通していた。当該期の学知やその形成過程については近年、関心が高まっており、『岩波講座　「帝国」日本の学知』シリーズは、政治学・法学・経済学・医学など、実践的技術知を対象としている。しかし、軍事的学知はとりあげられていない。カピル・ラジャ、水谷智也訳『近代科学のリロケーション』（名古屋大学出版会、2016 年）は、科学が非ヨーロッパ地域での実践の結果であるとしてインドを対象としたが、分析が測量と地図作製に限定され、東インド会社が雇っていた軍隊の実践知を射程に入れていない。戦争遂行には天文学、地理学、医学、数学、土木・建築学、法学、政治学などさまざまな知識が必要とされたことを考えると、実践的観点から軍事の学知的側面を見直す必要があろう。

19 世紀を中心とした近世近代移行期の政治的・社会的・文化的状況からみれば、軍人の移動や軍事関連書の出版・流通・翻訳・受容は、軍事力の強化や帝国主義の拡大としてのみとらえることはできないのではないかと考えられる。

２．研究の目的

近現代史において軍人は、帝国主義を推進した軍事力の担い手としてイメージされがちである。しかし、国民国家が形成される 19 世紀を中心とした時期の軍事的世界においては、国境を越えて軍人と軍事関連書がグローバルに移動し、軍事的学知が共有されていた。そこで近世史研究と近代史研究、自国史研究と他国史研究を架橋し、軍事史的観点からこの世界像の一端を明らかにすることを目的とした。日本の近代軍隊形成の観点から、本科研では日本・フランス・ドイツを主とし、オランダ・オスマン帝国・清朝を参照系と位置づけ、共同研究体制を構築して臨むことにした。

３．研究の方法

研究体制は、海外研究協力者や早稲田大学高等研究所との協力関係のもと、共同研究者・研究協力者による「軍人の移動と交流」「軍事関連書の翻訳・流通・受容」の 2 班構成とした。班長と代表者で代表者会議をもうけて年度計画を策定するほか、科研集会によって相互に情報を共有し、他国史研究者からのアドバイスや協力を得る方法をとった。この知見をもとに、早稲田大学高等研究所と共催で公開講演会を開催し、広く研究者に向けて研究の視角や視座を提供することにした。また、国内外の学会・研究会で個別に、あるいは海外研究協力者とともに研究成果を発表し、最終的な科研の成果を国際研究集会（国際シンポジウム）で発表する計画を立てた。

４．研究成果

(1)研究活動

科研集会における研究報告のほか、資料閲覧・戦跡視察を共同で行い、知見を共有して、日本史・東洋史・西洋史で共通に議論できるプラットフォームを形成した。その成果は個々の論文や書籍に反映されている。資料閲覧・戦跡視察先は以下の通りである。

2020 年度：福井市立図書館での「越国文庫」資料閲覧
2021 年度：①長崎・平戸視察、②「第二次長州征討」戦跡視察
2022 年度：「鳥羽・伏見の戦い」戦跡視察
2023 年度：フランス軍事関連施設視察とヴァンセンヌ国防省古文書館での資料閲覧

(2)3 つのレベルでの成果発信

①早稲田大学高等研究所との共催による公開講演会

国内の研究者を主たる対象として 13 回開催し、研究の視角や視座を提供した。

2019 年度：「露領中央アジア遊牧系軍事エリートの次世代育成」「近世ヨーロッパにおける傭兵の回遊と社会の負担」「近世イタリア君主国の常備軍と軍政システム～16 世紀フェッラーラ公国

の事例から」
2020 年度：「19 世紀のオーストリア海軍遠征記にみる海軍のグローバル化」
2021 年度：「ドイツ植民地戦争論のなかの義和団戦争」「フランス陸軍将校デュ・ブスケ（ジブスケ）の国際移動と知の交流―第 1 次軍事顧問団少尉から兵部省・左院・元老院付御雇外国人、そして在日フランス領事」「幕末維新期における西洋兵学の受容―翻訳兵書の分析視点―」
2022 年度：「藩・旧藩社会にみる「文明」―下総佐倉藩の事例から」「オスマン帝国の「小戦争」と暴力」「ペルビチン（覚醒剤）と独日関係―第二次世界大戦期を中心に―」「日本陸軍のグローバルな戦略・謀略と日独防共協定」
2023 年度：「仙台藩儒大槻磐渓のペリー来航絵巻「金海奇観」に見る西洋の軍事・文明情報」「極東での独丁戦争―天津沖でのデンマーク商船拿捕事件をめぐって」
　また、他の科研集会で本科研での知見を報告するなど、相互交流も行った。

②グローバルな科研の成果発信
　アジア（中国・モンゴル）やヨーロッパの国際会議で英語、フランス語、中国語などにより個人で行った。EAJS では海外研究協力者と 4 人でパネルを組んで発表した。また 3 日間にわたる国際研究集会「グローバル・ヒストリーからみた 19 世紀の軍事的学知の交錯―アジア＝ヨーロッパ」を、フランス・リール大学で CECILLE との共催により開催した。日・仏・英の 3 ヶ国語による国際研究集会で、研究分担者・海外研究協力者を中心とした。現在、このシンポジウムの成果集をフランス語で出版する計画である。日本側では『軍事史学』の特集号へ、複数回にわたり成果論文を投稿することになった。

③地域社会・一般社会への成果還元
　各自が地方での一般向け講演・報告を行った。本科研全体としては、津山洋学資料館で公開科研集会を開催した。その結果、地域振興の一環として、津和野町・津山市・中津市間で締結された「蘭学・洋学三津同盟」へ、研究面で協力できることがわかった。新聞の取材やテレビ番組の出演などによっても、本科研の成果を公開した。

(3)具体的な研究成果の内容
　本科研に限ったことではないが、コロナのため再三にわたり研究計画の変更を余儀なくされ、複数年にわたって繰越手続きを行うなど、想定外の作業に時間と労力を取られたことを最初に断っておく。図書館や文書館の所蔵資料の一部がオンラインで見られるようになったとはいえ、それは本科研が対象とする史料には当てはまらない。手稿文書や写本、出版物などについての海外史料調査は、当初の計画より大幅に遅れてオランダ、フランス、トルコ、ドイツで実施した。中国については現在の政治情勢では難しく、見送らざるを得なかった。

①データベース作成の進捗状況
　海外経験のある軍人について。日本については「陸軍軍人履歴データ」と「海軍軍人履歴データ」を作成した。留学、公使館付武官、観戦武官など海外経験のある陸海の軍人のデータベースである。砲術学校などへ留学した者、第一次大戦に参加してヨーロッパで戦争を経験した者、公使館付武官あるいは観戦武官として派遣された者などがいる。独仏戦争後にはドイツとフランス両国の戦跡を視察し、両国の軍人から戦闘状況などを聴取している。このように、当時の軍人は予想以上に海外経験があり、世界情勢を知る機会を持っていた。外交交渉にあたったり軍縮会議で列強と渡り合ったりできる能力が、海外経験を積むことで培われた様子がうかがえる。中国については、清朝で軍人・軍事顧問・軍事技術者などとして活動した外国人と、清朝から海外に留学した軍事関係者のリストを作成中である。網羅性の担保が課題として残るものの、人的交流の点からは、フランスとの関係が密接だったアロー戦争～清仏戦争期、ドイツとの関係が密接になった清仏戦争～義和団戦争期、日本への留学、日本からの招聘が活発化した義和団戦争～辛亥革命期に区分される。オスマン帝国からヨーロッパの軍事関連学校への留学生については、史料調査が遅れたため、現在作成中である。
　軍事関連書について。日本は幕末以降、オランダ語・フランス語・英語・ドイツ語の書物を輸入したが、史料が散在していることもあり、その全容は不明である。長崎海軍伝習所でオランダ商館員・教官用に注文された蘭書については、オランダ商館で作成された日本側への書籍売却領収書リストに含まれていない。そこでオランダでの史料調査により、その蘭書リストを作成した。ここから海軍伝習所での軍事教育の内容をうかがうことができ、オランダ語経由の軍事的学知を実践レベルで考えられる。オスマン帝国については、トルコ共和国軍事博物館付属図書館所蔵軍事関係オスマン語翻訳書文献目録を作成した。95 点のうち、ドイツ語が 53 点、フランス語が 15 点、英語が 11 点で、時代が下るとともにドイツ語の割合が急速に増加する。ジャンル別では戦術・用兵が 22 点、演習・教練・操典が 21 点、砲術が 19 点で、軍関係の出版所から刊行され、陸軍士官学校の教官が翻訳に携わることが多い。中国については、江南製造局付設の翻訳館で欧米人が中国語で口述し、それを中国人が漢文に翻訳する方法で、軍事関連書が翻訳されている。

中国での史料調査ができないため、欧米兵書の漢訳本の全体像は不明だが、日本には漢訳洋書が輸入されており、その方面からのアプローチも考えられる。たとえば、プロイセン人スケリハの英文著書は、江南製造局で英国人によって中国語に翻訳され、それが陸軍参謀局により和解(和訳）されている。

②軍人の移動と交流について

国境を越え、軍事的世界の中で移動・交流する軍人を見いだすことができる。典型例は日露戦争における観戦武官であろう。彼らは各国から日露両陣営に派遣され、記録は各国に持ち帰られて共有された。その中には参謀本部がまとめた「日露戦争の教訓」なども含まれ、日本軍の士気が注目されている。ほかにも観戦武官や公使館付武官など国家単位で派遣される軍人は、その人脈を活かして軍事情報を獲得して本国に送っており、軍事のみならず政治･外交面でも寄与した。

ヨーロッパからアジアへの軍事顧問派遣は、国家利害もからんでいた。日本では 1883 年から陸軍士官学校・陸軍大学校でドイツ語が教えられるようになり、1885～1888 年にはドイツから来日したクレメンス・W・J・メッケルが、参謀教育に従事した。メッケルの来日についてはフランス公使館付武官より、ドイツから軍事顧問を招聘するのであれば、フランスは日本からの留学と日本への教師派遣を断る可能性もあるとの不満が表明された。メッケルと同時期にはすでに、プロイセンのコルマール・フォン・デア・ゴルツがオスマン帝国の軍事顧問として、オスマン帝国軍の改革に携わっていた。軍事顧問の派遣・招聘は国家間関係にもかかわる問題であった。

ヨーロッパからアジアへの軍事顧問派遣をめぐっては、時に植民地を射程にいれる必要もある。フランス軍事顧問団は 1867～1868 年、1872～1880 年、1884～1889 年の 3 回にわたり来日して、幕府軍から大日本帝国陸軍に至る軍事教育その他に携わった。第一次軍事顧問団のジュール・ブリュネら数人は、榎本武揚に従って蝦夷地におもむき、日本との紛争を危惧したフランス公使の命令によって、箱館戦争本戦直前にフランス軍艦で、横浜から植民地のベトナムに連行されている。フランスは 1870 年の独仏戦争で負けたが、日本はその後もフランスからお雇い外国人を招聘した。ベトナムから戦闘経験のあるフランス人兵士を兵部省に雇用するなど、フランス本国からだけでなく、植民地からも軍事関係者が入国している。幕末の海軍伝習所でも、オランダの東インド軍所属の軍人が授業をしており、勝海舟はジャワへの留学を望んだほどである。1862 年に幕府の洋書調所は官版バタビア新聞を刊行したが，これはバタビア（現在のジャカルタ）のオランダ総督府の機関紙から世界のニュースを抄訳して印刷したものであった。オランダの植民地は、日本にとっては世界情報の中継地、西洋式軍隊・軍事教育の拠点の一つであったことになる。

軍人の移動や軍事的学知に着目すると、植民地と本国を対抗関係以外の側面からみることもできる。戦術・戦略は戦地の気候や地形などによって異なり、本国から派遣された軍人が植民地における戦闘方法を学ぶこともある。フランス人兵がズアーブ兵を通じて、アルジェリアに独特な戦闘方法などを学び、それがクリミア戦争で活かされたのはその一例と言えよう。また植民地や外地における戦闘経験が、本国での軍隊におけるキャリア形成に寄与した場合もある。特に将校は戦闘経験を重視するため、本国で戦争がない場合、外地で戦闘に従事し、その経験が参謀本部に組織の知として蓄積された。帝国主義による本国と植民地の対立構造だけではなく、戦争をめぐる経験や戦闘方法などの軍事的実践知が、双方向的に影響し合った側面も看過できない。

③軍事関連書について

まず何語で書かれた書物を翻訳したかに着目した。たとえば、オスマン帝国ではドイツ語文献からの翻訳が多い。ドイツとオスマン帝国の間で将校を相互に派遣しており、オスマン帝国における軍制改革にゴルツが関与していることもあるのだろう。日本では明治政府が陸軍をフランス式とし、フランス軍事顧問団を招聘して指導にあたらせたこともあり、当初はフランス語の軍事関連書が数多く翻訳された。プロイセンの軍人招聘の早い例としては、カール・ケッペンを 1869 年に招いた和歌山藩があげられる。当時までドイツ語文献はあまり輸入されていなかったが、すでにドイツで刊行されていたブラント、デッカー、シャルンホルストの兵書が、オランダで翻訳されたのち蘭書として日本に輸入され、和訳されていた。これは、シャルンホルストの翻訳者 2 人がオランダの士官学校の校長・副校長を務め、その教科書目録が日本に伝えられたことと関係している。日本にとって、オランダ語と漢語が翻訳言語でもあったことを示す好例である。

著作権の概念が確立していない時期には、翻訳の段階で原著者や原書の題名を書かないことが多く、重訳本はさらに原書を特定するのが難しい場合がある。またヨーロッパにおける軍事関連書の翻訳については、兵器・戦法の大きな変化や独仏戦争によって、軍事関連書の流通が変化した可能性がある。しかし、軍事的学知の共有が翻訳を通じてどのように進んだのかは、今後も追求すべき検討課題である。

また、兵学書の知見が実戦にどのように活かされたかを解明することも重要である。日本における具体例としては、クノープ著・大村益次郎訳『兵家須知戦闘術門』が、長州藩の三兵学科塾

の教育で使われ、その作戦が四境戦争（第二次長州征討）や上野戦争で使われていたことが明らかになった。

軍事的学知という点では地図･海図も重要である。西洋列強はヨーロッパでは対立していても、アジアでは協力関係にあり、手元にない海図を他国から提供してもらったりしていた。また、戦争は戦争地域に限定されていたわけではない。ヨーロッパ諸国間の戦争でも、アジアで航行する交戦国の船籍を持つ船に対していかに対処するかは、その戦争に対する国家としての政治的立場を表明する事柄であった。列強国間で定まっていった万国公法（国際法）は、軍艦旗・商船旗の掲揚なども含め、航路の開拓・発展とからみながら世界に広がっていく。

戦術・戦略や戦時に適用される法律などは、軍事的専門知識に属するが、これらは基本的に将校（あるいは下士官以上）が学ぶ内容である。軍事的学知の広がりという観点では、軍事新聞や軍事雑誌も見逃せない。ある程度の専門知識が必要な新聞・雑誌や、軍隊経験者・退役軍人を対象にした新聞・雑誌と、より一般的な読者を想定した軍事雑誌では、扱うテーマや情報の質・量が異なる。精密兵器がさほど発達していない頃、各地で発行される新聞には世界情勢が記され、戦争の様子や新型兵器の発明記事、戦艦の保有数や艦隊の配置、兵員数、予算規模などが掲載されることもしばしばあった。ドイツの軍事雑誌では、戦争に直結する作戦、戦略、戦術だけでなく、政治やテクノロジーなどの記事も掲載され、扱う範囲が広くなっている。日本では西南戦争の頃に『内外兵事新聞』が発行されたが、これは購読料さえ払えば誰でも入手可能で、陸軍省・海軍省の人事から、モルトケの演説や独仏の対立、海外情勢まで載っていた。19 世紀後半から 20 世紀初頭の『軍事新報』になると、兵器の発達や国家体制の確立、軍隊の情報管理の向上などにともない、軍事機密とされる情報範囲が定まってきて、軍部内に留められる軍事情報以外の情報が、段階的に社会へ発信されるようになる。軍事予算を議会が承認する国制のもとでは、軍事力を維持する説明責任が生じ、世界情勢の認識と自国の立場を明瞭にする必要があるため、軍事関連情報の共有が求められたと考えられよう。

軍事的学知としてこれまであまり注目されてこなかったが、衛生は富国強兵を志向する国家にとっては大きな問題である。とりわけ、天然痘やコレラのような感染症は、集団で生活する軍隊にとって、兵員数を急速に減少させる病気である。ヨーロッパではナポレオン戦争中に牛痘法が普及したが、それは感染症による損失が戦場での損失よりも多くなることを危惧したからであった。日本では遊郭の梅毒検査や森鴎外にみる兵食問題などを通じて、兵隊の健康維持、保健・衛生が考えられていくが、「財政・軍事国家」ならぬ「衛生・軍事国家」という観点で、衛生問題を軍事的学知の一環として取り込む必要があろう。

④以上の研究成果より、一国史観にとらわれない世界史像の一端が軍事史的観点からみえてきたように思われる。近代国民国家の人と支配領域を前提とした「戦争」「軍人」像はナショナリズムと深く結びついている。しかし、当該期の軍事的世界には、国境を越えた軍人や軍事関係者による人的ネットワークがあり、軍事関連書も国境を越えて流通・翻訳・受容されていた。このような人と書物のグローバルな交錯からは、西洋列強による一方的な帝国主義の強要という政治的理解に回収されない側面をうかがうことができる。内的深化＝ナショナリズムと外的拡大＝帝国主義の双方向の動きとその相互作用を、軍事的学知の生成・流通・受容から新たにとらえ直す可能性を開いたと言えよう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計34件（うち査読付論文　16件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　14件）

１．著者名 中島浩貴	４．巻 10361036
２．論文標題 クラウゼヴィッツ以降の戦争論の系譜と構築される戦争像	５．発行年 2023年
３．雑誌名 歴史学研究	６．最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西願広望	４．巻 第59巻第1号
２．論文標題 フランス植民地征服戦争再考－アルジェリア征服戦争からクリミア戦争までのズアーヴ兵」	５．発行年 2023年
３．雑誌名 軍事史学	６．最初と最後の頁 98-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉澤誠一郎	４．巻 1191
２．論文標題 中国におけるカー『歴史とは何か』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 思想	６．最初と最後の頁 54-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斉藤恵太	４．巻 144
２．論文標題 近世バルト海東部における二つのヴァーサ家の抗争ースウェーデンとポーランド＝リトアニアの合同と対立	５．発行年 2024年
３．雑誌名 京都教育大学紀要	６．最初と最後の頁 87-107
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷口眞子	4．巻 900
2．論文標題 「切捨御免」像の転換がもたらした近世武士の再定位	5．発行年 2023年
3．雑誌名 日本歴史	6．最初と最後の頁 116-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中島浩貴	4．巻 32号
2．論文標題 第一次世界大戦前の航空機言説と軍事的技術評価の形成	5．発行年 2023年
3．雑誌名 戦略研究	6．最初と最後の頁 3-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本知行	4．巻 58巻3号
2．論文標題 四境戦争における大村益次郎の作戦指導	5．発行年 2022年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 24-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小松香織	4．巻 71号
2．論文標題 オスマン帝国における西洋軍事知識の受容	5．発行年 2023年
3．雑誌名 早稲田大学　教育・総合科学学術院　学術研究（人文科学・社会科学編）	6．最初と最後の頁 155-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 斉藤恵太	4．巻 142号
2．論文標題 デンマーク戦争（1625-29）再考―国のかたちという視点から	5．発行年 2023年
3．雑誌名 京都教育大学紀要	6．最初と最後の頁 79-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木直志	4．巻 1号
2．論文標題 近世プロイセン軍の軍事条章	5．発行年 2022年
3．雑誌名 法と文化の制度史	6．最初と最後の頁 149-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本知行	4．巻 57巻1号
2．論文標題 長州藩の慶応期軍制改革に関する一考察	5．発行年 2021年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 118-140
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中島浩貴	4．巻 57巻4号
2．論文標題 ドイツ軍事雑誌における日露戦争の受容	5．発行年 2022年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 78-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小松香織	4．巻 第70号
2．論文標題 年金受給にみるオスマン帝国の「長い10年」―オスマン海運経営会議議事録から―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 早稲田大学　教育・総合科学学術院　学術研究（人文科学・社会科学編）	6．最初と最後の頁 229-245
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kobo Seigan	4．巻 19
2．論文標題 Le colonialisme des republicains sous le Directoire ? Le cas d’Eschasseriaux	5．発行年 2021年
3．雑誌名 La Revolution francaise	6．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4000/lrf.4572	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1．著者名 西願広望	4．巻 35
2．論文標題 フランス革命期におけるエシャセリオの植民地論―民族自立・自由貿易・持続的平和	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日仏歴史学会会報	6．最初と最後の頁 20-34頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 谷口眞子	4．巻 NO.8
2．論文標題 西周の新徴兵制構想―「兵賦論」の分析―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 WASEDA RILAS JOURNAL	6．最初と最後の頁 135-146頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 斉藤恵太	4．巻 第10号
2．論文標題 近世イタリアの君主国と三十年戦争―マントヴァ継承問題にみる国のかたちの諸相	5．発行年 2020年
3．雑誌名 世界史研究論叢	6．最初と最後の頁 1-19頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸畠宏太	4．巻 第10号
2．論文標題 作家ルイ・シュナイダーLouis Schneiderと軍事雑誌『兵士の友Soldatenfreund』 ―社会の軍事化の原風景か？―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 世界史研究論叢	6．最初と最後の頁 20-37頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 西願広望	4．巻 第56巻第2号
2．論文標題 フランス七月王政期のアルジェリア植民地戦争をめぐる言説―内戦と植民地戦争の親和性	5．発行年 2020年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 27-48頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 中島浩貴	4．巻 第56巻第2号
2．論文標題 『兄弟戦争』としての『普墺戦争』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 89-108頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 竹本知行	4．巻 第56巻第2号
2．論文標題 大村益次郎の関東鎮撫策	5．発行年 2020年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 29-51頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口眞子	4．巻 第66輯（2021年3月）
2．論文標題 1880年における西周の国際情勢認識―「上隣邦兵備略表」の分析―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6．最初と最後の頁 883-900頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 小松香織	4．巻 第69号（2021年3月）
2．論文標題 トルコにおける親日観の源流	5．発行年 2021年
3．雑誌名 早稲田大学　教育・総合科学学術院　学術研究（人文科学・社会科学編）	6．最初と最後の頁 169-186頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 佐々木真	4．巻 840号
2．論文標題 遅塚忠躬『ロベスピエールとドリヴィエ』：フランス革命研究の転換点（特集 西洋近現代史の「新しい古典」を読む）	5．発行年 2020年
3．雑誌名 歴史評論	6．最初と最後の頁 16-26頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 佐々木真	4．巻 第35号
2．論文標題 戦争の歴史を考える―ヨーロッパ近世・近代を中心に―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本歴史学協会年報	6．最初と最後の頁 11-24頁
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口眞子	4．巻 23号
2．論文標題 論説　ジュール・ブリュネの箱館戦争荷担処分について―新政府の「万国公法」認識の一端―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 法史学研究会会報	6．最初と最後の頁 24-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 谷口眞子	4．巻 65輯
2．論文標題 思想史と軍事史の架橋―西周「兵家徳行」をめぐって―	5．発行年 2020年
3．雑誌名 早稲田大学大学院文学研究科紀要	6．最初と最後の頁 734-754
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 竹本知行	4．巻 第55巻第3号
2．論文標題 山田顕義における軍隊観の形成-渡正元との邂逅を手がかりに	5．発行年 2019年
3．雑誌名 軍事史学	6．最初と最後の頁 105-128
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小松香織	4．巻 No.30
2．論文標題 近代オスマン帝国における福祉と戦争	5．発行年 2020年
3．雑誌名 早稲田大学大学院教育学研究科紀要	6．最初と最後の頁 15-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 松本彰	4．巻 12号
2．論文標題 ドイツ現代史における建築、記念碑、都市	5．発行年 2019年
3．雑誌名 ゲシヒテ	6．最初と最後の頁 88-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 斉藤恵太	4．巻 15号
2．論文標題 近世ヨーロッパの軍隊と貴族の紐帯―17世紀の神聖ローマ帝国と傭兵隊長ガラッソを例に―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 メトロポリタン史学	6．最初と最後の頁 101-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 鈴木直志	4．巻 841号
2．論文標題 戦争・軍事博物館の類型学－ヨーロッパ諸国と日本に見る「戦争の歴史化」の現在	5．発行年 2019年
3．雑誌名 白門	6．最初と最後の頁 58-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 丸畠宏太	4．巻 102号
2．論文標題 19世紀ドイツの兵士の世界―規律化と国民化―	5．発行年 2019年
3．雑誌名 近現代史研究会会報	6．最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 YANAGISAWA Akira	4．巻 No.77
2．論文標題 Qing "Government Caravans" in Kiakhta: The Activities of Bederge Muslims	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko	6．最初と最後の頁 1-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計61件（うち招待講演　5件／うち国際学会　8件）

1．発表者名 佐々木真
2．発表標題 フランスが見た日露戦争
3．学会等名 リール/国際研究集会
4．発表年 2023年

1．発表者名 西願広望
2．発表標題 対反乱作戦史のための試論――ヴァンデ、スペイン、アルジェリア、パリ（1793-1871年）
3．学会等名 リール/国際研究集会
4．発表年 2023年

１．発表者名 小暮実徳
２．発表標題 The Education at the Nagasaki Naval Academy ―Focusing on the Lists of Dutch imported books in Japan
３．学会等名 リール/国際研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 邦訳ドイツ兵書の起源を探る　―『泰西兵鑑』と二つの『三兵答古知幾』
３．学会等名 リール/国際研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 原田敬一
２．発表標題 軍事情報のネットワーク　―日本近代の模索
３．学会等名 リール/国際研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Gregoire SASTRE
２．発表標題 Genese du renseignement militaire japonais : creation de l ’ Etat-major de l ’ Armee
３．学会等名 リール/国際研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Andrew COBBING
２．発表標題 Early Meiji Intelligence Networks: the case of the Japanese Legation in Paris
３．学会等名 リール/国際研究集会
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 洋学の軍事科学化とドイツ兵書
３．学会等名 2023年度日本クラウゼヴィッツ研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 近世ヨーロッパにおける軍事の変遷と国家・社会
３．学会等名 法文化学会第25回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 十八世紀庫倫、恰克図貿易与清朝対民商的給票制度
３．学会等名 多語種文献与中国北疆民族史研究国際学術研討会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 有関清代中俄大黄貿易的幾点探索
３．学会等名 13-19世紀中央欧亜歴史文化国際学術研討会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 清代外交使節の謁見儀礼～叩頭と国書～
３．学会等名 公益財団法人東洋文庫2023年度後期東洋学講座
４．発表年 2023年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 清－ロシア間の外交における「翻訳」の変容
３．学会等名 早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所ワークショップ「「モンゴル」周縁の歴史・文化の動態」
４．発表年 2023年

１．発表者名 中島浩貴
２．発表標題 ドイツ語圏軍事雑誌の公共圏：1870年代を中心として
３．学会等名 軍事史学会第127回関西支部
４．発表年 2024年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 戦争は文明化したのか―16世紀から20世紀の戦争を考える―
３．学会等名 第23回日韓歴史家会議
４．発表年 2023年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 絶対主義と戦争
３．学会等名 松山大学法学部講演会
４．発表年 2023年

１．発表者名 長谷部圭彦
２．発表標題 対話から生み出されるもの
３．学会等名 第6回歴史総合シンポジウム「歴史教育の現場との対話―歴史の語り方、史資料の使い方」歴史学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hasebe, Kiyohiko（長谷部圭彦）
２．発表標題 A Plan to Establish a University of Islam by the Greater Japan Muslim League: Insights from Waseda University Archives
３．学会等名 International Symposium: The Formation of the Relationship between Modern Japan and the Islamic World
４．発表年 2023年

１．発表者名 Hasebe, Kiyohiko（長谷部圭彦）
２．発表標題 Common Experiences of Japan and Turkiye: Foreign Relations, Law and Education
３．学会等名 Joint International Symposium on Comparative Study of Legal Issues regarding Renewable Energy Industry and Investments between Turkiye and Japan
４．発表年 2024年

１．発表者名 Hasebe, Kiyohiko（長谷部圭彦）
２．発表標題 Japonya ’da Islam Universitesi Kurma Plani: Buyuk Japonya Musluman Ligi ’nin Gerceklesmeyen Faaliyeti
３．学会等名 Uluslararasi Calistay: Turk-Japon Iliskileri Tarihi Arastirma Kaynaklari
４．発表年 2024年

１．発表者名 原田敬一
２．発表標題 陸軍墓地の今後を考える
３．学会等名 第43回陸軍墓地講座
４．発表年 2023年

１．発表者名 西願広望
２．発表標題 Les colonies pour la revolution cosmopolite — Le cas d ’Eschasseriaux
３．学会等名 国際フランス革命史研究会（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 西願広望
２．発表標題 植民地征服戦争再考－19世紀前半
３．学会等名 フランス史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 西願広望
２．発表標題 フランスの軍用航空機－1870年代から1918年まで
３．学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会月例研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 黒龍江地区における駐防八旗の成立と「民族」呼称
３．学会等名 満族史研究会第37回大会
４．発表年 2022年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 清朝対中俄貿易的管理体制及其変遷：18世紀後半至19世紀初」「内亜与海洋：明清中央档案、地方文書及域外史料
３．学会等名 国際研討会　中央研究院歴史語言研究所（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 黒龍江地区駐防八旗的初期情況
３．学会等名 満文文献与清史研究国際学術研討会　中央民族大学（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 長谷部圭彦
２．発表標題 大統領の畑を耕し、トルコ人と絹を織る―大谷光瑞によるトルコ初の日本資本
３．学会等名 日本中東学会第28回公開講演会
４．発表年 2022年

１．発表者名 吉澤誠一郎
２．発表標題 戦前期日本の東洋史学の思想性と無思想性
３．学会等名 第22回日韓歴史家会議（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 斉藤恵太
２．発表標題 近世イタリア北部の貴族と三十年戦争―ゴンザーガ＝ボッツォロの子弟と軍務
３．学会等名 イタリア中近世史研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 中島浩貴
２．発表標題 第一次世界大戦前の軍事文化―民間の軍事文化を中心に
３．学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会月例研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 中島浩貴
２．発表標題 第一次世界大戦前の軍事と技術――航空機言説を中心に
３．学会等名 2023年度日本クラウゼヴィッツ学会研究大会シンポジウム
４．発表年 2022年

１．発表者名 中島浩貴
２．発表標題 第一次世界大戦前のドイツの民間人と戦争論
３．学会等名 JSPS科学研究費助成事業（19K13123）「英国における侵攻小説と第一次世界大戦のプロパガンダ的類似性の研究（代表者：深町悟）」
４．発表年 2023年

１．発表者名 丸畠宏太
２．発表標題 忘れられたプロイセン将軍カール・フォン・デッカー―19世紀前半期のプロイセンにおける兵役義務定着の努力の一断面―
３．学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会月例研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 谷口眞子
２．発表標題 西周の軍事思想―その世界史認識と日本の独立国家像―
３．学会等名 島根県立大学・津和野町主催「第18回西周シンポジウム]（招待講演）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Shinko TANIGUCHI（谷口眞子）
２．発表標題 Jules Brunet’s teaching to Meiji Japan in transnational and international perspective
３．学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Akira YANAGISAWA（柳澤明）
２．発表標題 The Eight Banner System and Ethnic Transformation in 17-19 c. Manchuria
３．学会等名 23rd Biennial Conference of European Association for Chinese Studies（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 近世フランスの主権と国家：小シンポジウムⅢ「礫岩のような国家」に見る「主権」理解の批判的再構築
３．学会等名 第71回日本西洋史学会大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 近世プロイセン軍の連隊長人事と帝国諸侯
３．学会等名 比較国制史研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 丸畠宏太
２．発表標題 作家ルイ・シュナイダーと雑誌『兵士の友』
３．学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 柳澤明
２．発表標題 17-19世紀の露清外交と媒介言語
３．学会等名 人間文化研究機構（NIHU）ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業」島根県立大学拠点
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 近世常備軍における兵士の駐屯生活
３．学会等名 比較国制史研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 KOMATSU Kaori（小松香織）
２．発表標題 The Military Ethos in Modern Turkey and Pertev Pasha's Perception of Bushido
３．学会等名 Japanese Studies in Turkey Conference IV（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 SEIGAN Kobo（西願広望）
２．発表標題 Les colonies pour la Revolution cosmopolite- Le cas d’Eschasseriaux
３．学会等名 Colloque international - Cosmopolitismes et patriotismes au temps des Revolutions（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島浩貴
２．発表標題 ドイツと戦略
３．学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会研究大会シンポジウム（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 戦争の「歴史」を考える―ヨーロッパ近世・近代を中心に
３．学会等名 2019年度日本歴史学協会総会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 ヨーロッパの戦争・軍事博物館の動向
３．学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムⅨ
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 戦争・軍事博物館の類型学
３．学会等名 第69回日本西洋史学会大会 小シンポジウムⅨ
４．発表年 2019年

１．発表者名 斉藤恵太
２．発表標題 近世ヨーロッパの軍隊と貴族の紐帯　17世紀の神聖ローマ皇帝軍を中心に
３．学会等名 メトロポリタン史学会第15回大会シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 世界史の中の武人 ―越境と帝国秩序―
３．学会等名 メトロポリタン史学会第15回大会シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 鈴木直志
２．発表標題 常備軍時代のドイツにおけるポリツァイと軍隊
３．学会等名 九州西洋史学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 近世国家の統治システムと軍事
３．学会等名 九州西洋史学会秋季大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 吉澤誠一郎
２．発表標題 旅大回収運動(1923年)再考
３．学会等名 史学会第117回大会東洋史部会
４．発表年 2019年

１．発表者名 中島浩貴
２．発表標題 軍事的な知の範囲――第一次世界大戦前の軍事雑誌を中心に
３．学会等名 日本クラウゼヴィッツ学会定例研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 長谷部圭彦
２．発表標題 大谷光瑞のトルコ投資―共和国初期のアンカラとブルサにおける日本資本
３．学会等名 東洋大学アジア文化研究所開設60周年記念国際公開シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 長谷部圭彦
２．発表標題 オスマン帝国末期における法曹養成と宗教
３．学会等名 大学史研究会第42回研究セミナー
４．発表年 2019年

１．発表者名 佐々木真
２．発表標題 「主権国家再考」の議論について
３．学会等名 科研基盤（A）「歴史的ヨーロッパにおける主権概念の批判的再構築」公開研究会『「主権国家再考」の再考』
４．発表年 2019年

〔図書〕　計25件

１．著者名 谷口眞子	４．発行年 2022年
２．出版社 吉川弘文館	５．総ページ数 449
３．書名 葉隠〈武士道〉の史的研究	

１．著者名 佐々木真	４．発行年 2022年
２．出版社 河出書房新社	５．総ページ数 192
３．書名 図説　フランスの歴史	

１．著者名 吉澤誠一郎・林佳世子責任編集	４．発行年 2022年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 304
３．書名 岩波講座　世界歴史17　近代アジアの動態	

１．著者名 吉澤誠一郎（万魯建訳）	４．発行年 2022年
２．出版社 社会科学文献出版社	５．総ページ数 466
３．書名 清末都市的政治文化与社会統合――天津的近代	

１．著者名 竹本知行	４．発行年 2022年
２．出版社 萩ものがたり	５．総ページ数 55
３．書名 大村益次郎　近代的学知の受容と実践（上）幕末編	

１．著者名 竹本知行	４．発行年 2022年
２．出版社 萩ものがたり	５．総ページ数 59
３．書名 大村益次郎　近代的学知の受容と実践（下）維新編	

１．著者名 柳澤明	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 670
３．書名 分担執筆「露清外交におけるコミュニケーション・ギャップの実相：18世紀初頭と19世紀中葉の二つの事例を通じて」李暁東・李正吉編著『論集 北東アジアにおける近代的空間：その形成と影響』	

１．著者名 竹本知行	４．発行年 2022年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 516
３．書名 大村益次郎―全国を以て一大刀と為す	

１．著者名 吉澤誠一郎	４．発行年 2021年
２．出版社 名古屋大学出版会	５．総ページ数 304
３．書名 愛国とボイコット――近代中国の地域的文脈と対日関係	

1．著者名 新谷卓・中島浩貴・鈴木健雄編著	4．発行年 2021年
2．出版社 彩流社	5．総ページ数 213
3．書名 歴史のなかのラディカリズム	

1．著者名 吉澤誠一郎	4．発行年 2022年
2．出版社 ミネルヴァ書房	5．総ページ数 362
3．書名 監修『論点・東洋史学――アジア・アフリカへの問い158』	

1．著者名 柳澤明	4．発行年 2021年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 277
3．書名 分担執筆「北辺からみる『大清一統志』」小二田章・高井康典行・吉野正史編『書物のなかの近世国家：東アジア「一統志」の時代』	

1．著者名 柳澤明	4．発行年 2022年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 308
3．書名 分担執筆「清朝時代のモンゴル社会」『東アジアと東南アジアの近世：15～18世紀』（岩波講座世界歴史12）	

1．著者名 柳澤明	4．発行年 2022年
2．出版社 東洋文庫	5．総ページ数 189
3．書名 分担執筆「第6章 アムール上流域調査　―アルバジンとスタノヴォイ山脈」「第7章　ザバイカル調査　―ネルチンスクとウラン・ウデ」細谷良夫編著『清朝の史跡をめぐってⅡ――アムール流域篇――』	

1．著者名 鈴木直志	4．発行年 2022年
2．出版社 中央大学出版部	5．総ページ数 508
3．書名 分担執筆「近世プロイセン軍における諸侯連隊－家門政策の手段としての連隊」松本悠子・三浦麻美編『歴史の中の個と共同体』	

1．著者名 長谷部圭彦	4．発行年 2022年
2．出版社 戎光祥出版	5．総ページ数 240
3．書名 分担執筆「オスマン帝国の近代化は教育をどう変えたのか」歴史学会編『歴史総合　世界と日本』	

1．著者名 原田敬一	4．発行年 2020年
2．出版社 本の泉社	5．総ページ数 268
3．書名 日清戦争論 ― 日本近代を考える足場 ―	

1．著者名 Shinko Taniguchi（谷口眞子）	4．発行年 2020年
2．出版社 Vondernhoeck & Ruprecht Verlage	5．総ページ数 312
3．書名 分担執筆"The Military Raison d'Etre in Peacetime: The Characteristics of Bushido (the Way of the Samurai) in Early Modern Japan" in Markus Meumann, Andrea Puhringer (eds.) The Military in the Early Modern World	

1．著者名 長谷部圭彦	4．発行年 2020年
2．出版社 明石書店	5．総ページ数 261
3．書名 分担執筆「公平と配慮―オスマン帝国とトルコ共和国における教育と性差」長沢栄治監修、服部美奈・小林寧子編『教育とエンパワーメント（イスラーム・ジェンダー・スタディーズ3）』	

1．著者名 吉澤誠一郎	4．発行年 2020年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 332
3．書名 分担執筆「白鳥庫吉と東洋史学の始原」吉見俊哉・森本祥子編『東大という思想――群像としての近代知	

1．著者名 SAITO Keita（斉藤恵太）	4．発行年 2020年
2．出版社 Vandenhoeck & Ruprecht	5．総ページ数 346
3．書名 Das Kriegskommissariat der bayerisch-ligistischen Armee wahrend des Dreisijahrigen Krieges	

１．著者名 中島浩貴	４．発行年 2019年
２．出版社 彩流社	５．総ページ数 268
３．書名 国民皆兵とドイツ帝国	

１．著者名 吉澤誠一郎	４．発行年 2019年
２．出版社 開源書局	５．総ページ数 483
３．書名 分担執筆「近代日本的中国城市指南及其印象：以北京、天津為例」巫仁恕主編『城市指南与近代中国城市研究』	

１．著者名 谷口眞子	４．発行年 2019年
２．出版社 Krakow:KSIEGARNIA AKADEMICKA	５．総ページ数 331
３．書名 分担執筆「近世身分制社会における忠と孝―近世武士像創出の一面―」Dariusz Gluch, Patrycja Duc-Harada, Senri Sonoyama eds, Japanese Civilization: Tokens and Manifestations	

１．著者名 長谷部圭彦	４．発行年 2019年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 374
３．書名 分担執筆「近代化の中の留学―比較史的考察」永原陽子編『人々がつなぐ世界史（ミネルヴァ世界史叢書4）』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ホームページ「19世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」
https://www.military-knowledge-19c.com

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	中島　浩貴 (NAKAJIMA Hiroki) (00599863)	東京電機大学・理工学部・准教授 (32657)	
研究分担者	竹本　知行 (TAKEMOTO Tomoyuki) (00631904)	安田女子大学・現代ビジネス学部・准教授 (35408)	
研究分担者	小松　香織 (KOMATSU Kaori) (10272121)	早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	丸畠　宏太 (MARUHATA Hiroto) (20202335)	敬和学園大学・人文学部・教授 (33104)	
研究分担者	斉藤　恵太 (SAITO Keita) (20759196)	京都教育大学・教育学部・准教授 (14302)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	柳澤　明 (YANAGISAWA Akira) (50220182)	早稲田大学・文学学術院・教授 (32689)	
研究分担者	長谷部　圭彦 (HASEBE Kiyohiko) (60755924)	東京大学・東洋文化研究所・特任研究員 (12601)	
研究分担者	原田　敬一 (HARADA Keiichi) (70238179)	佛教大学・歴史学部・名誉教授 (34314)	
研究分担者	佐々木　真 (SASAKI Makoto) (70265966)	駒澤大学・文学部・教授 (32617)	
研究分担者	吉澤　誠一郎 (YOSHIZAWA Seiichiro) (80272615)	東京大学・大学院人文社会系研究科（文学部）・教授 (12601)	
研究分担者	鈴木　直志 (SUZUKI Tadashi) (90301613)	中央大学・文学部・教授 (32641)	
研究分担者	小暮　実徳 (KOGURE Minori) (90537416)	順天堂大学・国際教養学部・先任准教授 (32620)	
研究分担者	西願　広望 (SEIGAN Kobo) (00326521)	東京電機大学・理工学部・研究員 (32657)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	松本　彰 (MATSUMOTO Akira)		
研究協力者	竹村　厚士 (TAKEMURA Atsushi)		

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計1件

国際研究集会	開催年
Circulation des savoirs militaires au XIXe siecle dans l ’histoire globale, en Asie-Europe（グローバル・ヒストリーからみた19世紀の軍事的学知の交錯―アジア＝ヨーロッパ）	2023年～2023年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	リール大学			
英国	ノッティンガム大学			
フランス	セルジー・パリ大学			
フランス	トゥールーズ大学			